
商鼬

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

商飴

【Nコード】

N1045E

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

不思議な商品売って金を稼ぎ、人間世界を生きる妖怪達がいた。
今日、彼等の売り物によっていろいろと狂わされるのは誰なのか…
…。

開業：陰口（前書き）

怪社が公開できなくなったので、キャラクターを流用・転換した作品として即掲載しました。一応原作（？）のストックの試作品としていろいろ書いていきたいなど。

開業…陰口

マントコートを羽織り、目深にハット被った男がいた。何故か男はコートの袖に手を通してはいない。

男は、一人の幸薄そうなスーツ姿の青年と話しながら、何やら物を薦めているようだった。

しばらく粘りに粘った末、男は青年に何かを手渡し、その見返りに札束を何枚か受け取ると、ヘコヘコと何回か札をして去っていった。

取り残された青年は、不思議そうにその手渡されたものを眺める。

「……陰口^{いんく}？」

そうつぶやいて、なおも青年は首を傾げて、その“陰口”の説明書きを見た。

『中に入ってる棒を取り出してください。先端が黒い棒です。それをマッチのようにして、箱に書いてある赤い線で摩ると、効果が現れます』

書かれている通りに、男はその道具を使った。すると、黒い部分からぼんやりと煙があがる。すると、煙から何か奇妙な音が聞こえてきたではないか。

それが何かの会話に聞こえた青年は、そっと煙に向かって耳を近づける。

「橋崎さん、いつも思ってたけど根暗」

「しょーがないんじゃない？ 浮気した奥さんにそのまま逃げられたって聞くし、子どもだって向こうに取られたんでしょ？ 入社した時から暗かったけど、最近はそれが駄目の方向に磨きがかかったというか」

「そのうち辞めちゃうんじゃない？」

「かもねー。まあ、その代わりに誰かイケメン入ってくれるなら、私はいつでも歓迎だけど」

ぼっ。という音とともに、会話は消えた。青年は腕を震わせて、今は煙の消えた棒を、指で折っていた。その表情は非常に険しい。「アイツラ、許さない。仕事が俺よりも遅い癖に、チクシヨウ、チクシヨウ」

そして、そのままどこかへと走って消えていった。

あきないたち
「商鼬様、おかえりなさいませ」

「御勤め、ご苦労様です」

川原に、双子らしく動作の整った二人の子どもが、マントコートの男に駆け寄ってきた。男はそれに返事をする、シートと口に手をやってから、川原の近くにある茂みに身を潜めた。

身を潜めた後、商鼬と呼ばれた男は、マントコートを鬱陶しそうに脱ぎ捨てた。

男は人の格好をしていなかった。長く、長細いサボテンのようにスラッと伸びた体格、鋭い目付きと牙。そして丸い耳、その格好は本物の鼬が二本足で歩いているみたいだった。

しかし、彼の背中には、何故か巨大なソロバンが縄で括られている。果たして何のために使うかはわからない。

「どうですか。商品は売れましたか？」

駆け寄ってきた子ども達も、体系が人間に似ていただけで、よく見ると人ではなかった。書生服と袴姿をした仔狐が二匹、二本足で飛び跳ねているのだ。

「売れたよ。しかも、あの陰口がね」

「あれが売れたんですかっ！」

「なんか、自分がどう思われとるか聞きたいうちゅう方がいてのお。売れ残ったけえ捨てようゆうて思うとったのに、儲け儲け。キキキキキ」

双子の仔狐は、その笑い声を一生懸命真似ようとした。しかし結

局はケケケとクククにしかなかった。

「それじゃあ、儲かった金で妖怪ラーメンでも行くんか？」

「本当ですかあ！」

「わーい、今日の商魴さんは気持ち悪いくらいに太っ腹だー！」

その一言に、商魴は少し顔をしかめたが、咳払いをして持ち直すと、二匹を連れて茂みを掻き分けていった。すぐに二人も後を追った。

そして気づけば、この奇妙な三人組は、茂みの中から一瞬にして姿を消していた。

登場人物・執筆予定エピソード

登場人物

あきないたち
商鼬

人間世界で不思議なものを売って生活している鼬の妖怪。背中にソロバンを背負っている。

とても高圧的な性格に見えて、とても小心者。妖怪だが人を襲えるだけの力はない。

毛の色は黄金色で、縁起が良いと周りからは言われているが、本人は目立つのであまり好んでいない。

巨大なソロバンは金勘定として勿論使うが、時折巨大化させて移動手段として使うことも出来るが、物が傷むので出来れば乗りたくないと考えている。

まがこ
勾狐

二本足で歩く、双子の仔狐の兄。書生服を着ているのが特徴。

活発だが、実は妙なところで度胸が無い。変化出来るのは自分より小さい動物だけ。

とある大妖怪の狐から修行に出されている身だが、怖い師の顔を見なくて済んだと安心してている。

たわこ
戯狐

二本足で歩く、双子の仔狐の弟。袴姿を着ているのが特徴。

陽気だが警戒心が強く、力が無いのですぐに逃げる臆病者。変化出来るのは自分より小さい無機物だけ。

とある大妖怪の狐から修行に出されている身だが、少しだけ師匠が恋しくなっている。（それでも師は畏怖の対象）

大千狐
だいせんこ

四千年以上を生き、大妖怪が千人束になってかかっても勝てないといわれるほどの力を持つ大妖怪。しかし普段は力を最小限に抑え、密かに暮らしている。

唯一の弟子達が未熟なため、社会勉強を兼ねて商鼬の下で働かせている。基本的に暇人で、暇つぶしに人間を脅かすのが趣味。

執筆予定エピソード

- 一品目・切剣せつけん
- 二品目・狐火煙草きつねびたばこ
- 三品目・浄車券じようしやけん
- 四品目・競骨けいこつ
- 五品目・焚灰便たくはいびん

一品目・『切剣』その1

俺は、同僚の志島^{ししま}さんに恋をしている。そんな、今更青春じみた恋心を抱いている会社員だ。

うちの会社はそれほどデカくないが、倒産という言葉からは今のところほど遠い、とある印刷会社だ。そんな会社の同期が彼女だった。

彼女はとても優しい人だ。自他共に認める根暗な俺のこともいろいろと気にかけてくれていた。同僚達と食事にいったときも、僕にもいろいろと話を振ってくれたりもした。

それだけでなく、彼女は容姿端麗で仕事もテキパキとこなす。皆からも慕われていて、昇進の話も出ている。正に俺とは正反対の場所にいる女性だ。

そんな彼女に恋しているなんて、俺も随分と身分の合わない恋愛をしてしまったものだ。自分で自分を笑いたくなる。

だけど、やっぱりそんな恋が叶う筈もない。彼女は今、同じく同期の中岡^{なかおか}にご執心だ。

何せそいつは一流大学出のエリート。既に係長に出世していて、俺にあれやこれやと命令してくる立場にある。こいつも俺とは違う世界に生きている人間だ。

住んでいる世界にいない二人の間に入り込んでいく余地なんて当然なく、ただ彼女の厚意に必死な笑顔で「ありがとうございます」というのが、今の俺には精一杯だった。

会社から出ると、一度振り返ってため息をつくのが最近の癖だ。もう病気だな、笑うことでしか自分を保てなくなった自分を見ると、つくづく自分はおかしくなったと自覚する。

仕方ないから今日も酒を買い込んで、一人で涙しながら夜更けまで飲み明かすことになるのだろう。こういう時に、親友を呼びたい

ところだ。

帰る直前、ふと風呂の石鹸をきらしていたことを思い出した俺は、薬屋を探すことにした。そっちのほうが安いしたくさん個数が入っていることが多いから、割の合わないコンビニでは買わないことにしている。

ところが、もうこんな時間になると薬屋は開いていないらしく、既にシャッターが閉まるところになっていた。オバサンのようにスライディングして入る根性も無かった俺は、がっかりしてその場から引き返すことにした。

こうなればもう、コンビニで売っている石鹸を買うしかないらしい。贅沢出来る身分ではないが、味気ない感触と匂いでガマンするしかないというのは、ちょっと億劫だ。

「セッケンならこちらに置いてあるんよ」

自分でも背中が曲がっていることが理解出来るほどガツカリしていると、ふいに声をかけられた。見ると、マント姿の奇怪な人間が、布を地面に敷いて露天を開いていた。何やらガラクタがたくさん置いてある。

下手に関わらないうちに逃げようとする、何者かが前を遮ったような感じがして、俺は足を止めた。しかし目の前に人はいない。

「まあまあ、お一つ御覧になってみてください」

「きつと、あなたが探しているものが見つかるはずですよ」

下から声が聞こえたので見てみると、子どもが二人俺の行く手を遮っていた。が、彼等は子どもにしては何かが違った。

書生服と袴姿という、コスプレまがいの格好をしたその二人の子ども達は、身体中毛だらけだった。

それだけでも驚くべきことなのにも関わらず、おまけに彼等は手の形も人間とは違っていた。血豆を作る人間はいても、ニクキュウのある人間なんているはずがない。

「これも何かのご縁じゃけえ。このセッケンを見てみてつかあさいよ」

後ろからさっきのマント姿の男が話しかけてきた。逃げることの出来ない臆病な俺は、仕方なくその話に従うことにした。男からは、なんとなく獣の匂いがして、こいつも人間ではないのだろうなと俺は悟った。

俺は、そのセッケンと言われて渡されたものを見てみた。物凄く豪華な装飾をされた物体は、何かを収めるものみたいらしく、先端には何かの取っ手が飛び出ている。

この取っ手から出てくるものがセッケンなんだろうかと少し疑問に思いつつも、俺はそれを引き抜いてみた。そして、腰を抜かした。それは刀剣だった。肉厚のそれは日本の刀らしい形をしつつも、どこか棍棒のように丸く太い。つい驚いて手から離してしまったそれを、先程の子ども達は急いでキャッチして、二人揃って汗を拭いた。

「お客様困るんじやのお。高いんじやけえ」

「あの、これって本当に泡立つんですか？ 石鹼に見えないのですけれど」

「いやいや。こりゃあ身体を洗う石鹼じゃあない」

「へ？ じ、じゃあこれは一体なんですか」

と俺が慌てた様子で聞いてみると、その男はマントの中から鋭い眼光をチラチラと見せながら、ここがセールスポイントとばかりに細い指を俺に向けながら言った。

「こりゃあ人の縁を断つ剣。切剣之縁^{せっけんのえん}じゃ。ほら、鞘にも書いてあるじやろう？」

俺は少しオドオドしながら、子どもが抱えている剣の鞘を見た。

確かに“切剣”と記されていた……。

一品目・『切剣』その2

俺は、家に帰ってから、持ち帰ってきた風呂敷を解いた。そこには、鞆に収まった一振りの剣が包まれていた。

見ての通り、俺は切剣を買ってしまった。とんでもなく高い買い物だったので、少し後悔もある。はたして本当に人の縁なんて切れるのだろうか。

家のソファアーに座ってテレビを付けながら、俺はあの化け物の言っていた言葉を思い出していく。

これを使ううえでの注意を、彼はとても親切に親身にいろいろと教えてくれたのだ。アフターサービスとかいうものの一環らしい。

「この剣は、人の縁を切ることが出来るんじやが、縁を切るっちゅうこたあ、その人間同士のげに元からの縁を断ち切るもんじや。よって二人は他人同士に戻ってしまうっちゅうことじや」

「……はあ」

「つまり、これを使うと夫婦すら他人になってしまうわけなんよ」

「それが本当なら、すごいことですね……」

「信じとらんじやの。じやが、夫婦の縁を引き裂おったら、どうなるかわかるんか？」

「さ、さあ」

「例えてゆうたら子どもがおったとするんじやのお。でも、二人の縁が切れると、それまじやった思い出や干渉やらが全て消えてしもおて、子どもの存在ものおな」

「……」

「そして、そのことはこの世界の安定を大きく揺るがすことになります。それだけこの一振りの重さがどれだけのものかというのだけ

は、重々ご理解ください」

「は、はい。それは恐ろしい……」

「ただ恋人くらいじゃったら、まあ大丈夫じゃ。間にガキさえおらにゃあ、あんたあ人殺しの罪を背負うこともないじゃろう。まあその辺りばっかしゃあよう気をつけて、使ってつかあさいのお。それに、もし間違えて切ったとしても……」

といって、化け物は狐の双子の間にあった糸を、その剣でズバツと切り裂いた。その縁の糸は空中をヒラヒラと舞って、どんどんその距離を離れていく。

同時に、狐の二人がとても驚いた顔になって、互いを見詰め合った。本気で初対面のような顔をしているのだ。これが演技だとすれば、彼等はハリウッドにスカウトされてもよいだろう。

だがそうすると、二人の姿が段々とぼやけて移ってきた。オロオロとして自分の身体を見つめて慌てだす二人を見て、化け物は俺に剣の鐐を近づけてきた。

「間違えたら五分以内に剣を鞘に収めて、この鐐を回してつかあさい。すると切った縁が修復されますけえの。ただし、五分を過ぎるとなんぼやっても戻らん」

「……随分便利なんですね」

「でも万能じゃあないけえ。どうじゃ？ この商品についてちゃあ」

「わかりました……それで、代金ですが」

といって俺がサイフを出すと、化け物がニタツと笑った。口がとても広く、やはりコイツが人間でないことが理解できた。

「お気に召さんにゃあ、三日以内ならご返品承るんじゃけえの。ただし、そりゃあ一人の縁も切つとらん時に限るけえあしからず……で、代金は」

化け物は、そういつて今まで羽織っていた布を取った。俺は啞然としてその姿を眺めていた。

鼬だ、目の前に巨大なソロバンを背負った鼬が立っていた。毛の色は狸のようでいて、狐のような色にも見える。

そんな鼯が二本足で立っている。身体がデカイだけでは飽き足らず、彼は人間とは骨格は違うものの、ちゃんと二本足でしっかりと立っているのだ。

そして化け物は、巨大なソロバンを目の前に出して、先端を切剣の鞘に当てると、ギターを弾くようにしてそれを弾き始めた。

「まずは先んじて五万円。お気に召したらさらに五万円追加っちゃうことで」

「五万、ですか……」

「嫌ならよいよ。この話はなかったっちゅうことで」

といって、鼯は店をさっさと畳もうとした。なので俺は急いで彼に詰め寄った。

「待ってください！ わかりました。払います！」

「まいど」

鼯は、ニコニコとした顔で俺に切剣を渡すと、尻のポケットから落ちた財布を拾い上げ、きっちり五万円を取り上げた。慣れた手つきであった。

「じゃあ、また三日後に五万円をさらに請求しにまいるんじゃけえの。それまでようお考えつかあさい」

鼯はそう挨拶して一礼すると、そそくさと店を畳んでまた布を被った。布を被れば、確かに一目で化け物とはわからなかった。狐の双子は、店を片付け終わると鼯の布の中へと潜り込んでいく。

「あ、これ持っとなつてつかあさい」

別れ際、彼は俺に名刺を渡してきた。とても汚い字だったが、なんとか読める程度ではあった。

『商鼯・怪奇商店』

とだけ書かれた簡素なそれを眺めているうちに、一団はすっと消えていた。

「本当に夫婦の仲を引き裂けるのだろうか？」

俺はそんな疑問を持った。いくらあれだけ現実的だったとしても、あれが狐の演技だったとも考えられる。化かされた可能性だってある。

とりあえず、俺はまず試し切りをしてみることにした。隣に住んでいる子持ちの熟年夫婦がいるので、これに対して使ってみたらどういうことになるかと。

これを使う時は、ただ鞘から出して、対象に向かって意思を集中させながら、少しだけ刀をクイツと動かせば良い。かといって、いきなり尋ねて刀を後ろに隠していたら、ただの変態でしかない。

俺は、隣の大黒柱が帰ってくるのを窓からこっそり伺って、試しに夫婦の仲を切ってみることにした。少し待っていると、大体予測通りの時間に父親は帰ってきた。

鞘から切剣を取り出すと、夫婦のものだと思われる一番太い繋がりを切ってみた。一瞬父親はピクツとしたが、すぐに自宅へと入っていく。

しばらくして、隣の家から悲鳴が聞こえてきた。奥さんの声だ。俺はびっくりして隣にいてみると、そこにはフライパンを持った奥さんが、夫を叩き殺そうとしていた。

「お隣さん！ この人変態です！ 早く警察に連絡して！」

「お、落ち着いてください。この方はあなたの旦那さんでしょう？」

「冗談。こんな人知りませんよ！」

すごい。本当に他人になっている。俺はついでに子どもの存在も確認してみたが、開いていた靴箱に、子どもの靴はなかった。

これはサクラでもなんでもない、実際のことだと喜んだ俺は、急いで家に戻って剣を鞘に戻して、錨をひっくり返しておく。

それからもう一度言ってみると、どうしてフライパンなんか持っているのかと、旦那が目ギョツとさせて驚いていた。ついでに玄関から出てきた子どもも驚いていた。

靴箱にはちゃんと子どもの靴もある。こうして、子どもの存在もこの世に復帰したのである。

「すごい！」

俺は思わず、自分の部屋で大声を出して感動した。そして、一つの欲望が生まれた。

あの二人の仲を引き裂いてしまえば……全て無かったことになる。俺に振り向いてくれることはないかもしれないけれど、少なくとも奴とは結ばれなくなる。

覚悟を決めた。俺は鞄にしまった剣をまた風呂敷に包むと、会社用の鞆の中にギリギリで詰め込んだ。これで準備は出来た。

明日が楽しみだ、と俺は部屋の中で延々と高笑いをしていた。

一品目・『切剣』その3

俺は、目的を果たす前のトイレの中にいた。もう、その場で大笑いしたい気分だった。

素晴らしい、こんなものがまさか手に入るとは、俺は何回もその切剣を眺めては掲げて、その力に酔いしれていた、それだけでもう満足しそうな勢いだ。

早起きした俺は、職場にいく道中で、俺は他にもあれからいろいろ試して見た。誰それと構わず、片っ端から縁を切っていった。

誰に対しても、この剣は効果覷面。俺が切る人切る人、みんな他人になって顔を見合わせたあと、大きく揉めるのだからとても気分が良い。

俺は切る度にツバを一回転させ、関係を修復していたが、もしかしたらこれは一次的な効果であって、本当は鞘など関係ないのではないか、とそういう疑念が浮かび始めた。

浮かんだ疑問を晴らすには実践するしかない。俺は一番手っ取り早く効果が分かる、親子連れを探した。そして俺は早速見つけた。

朝っぱらだというのに、疲れて寝てしまったのか、父親の背中の上で静かに寝ている子どもがいた。妻らしき女が横で、幸せそうに微笑んでいる。

これは正に絶好のチャンスであると、俺は刀剣に念を集中させ、子どもの中に垂れている夫婦の縁を切り取った。

すると、父親の背中にいた子どもが消滅した。おまけに、丁度縁のある頃に妻が彼に対して肩を寄り合わせていたために、二人は辺りも気にしないほどの大喧嘩を始めたではないか。

これは好都合、この調子でいけば、揉め事がこじれているうちに五分が経つ。そして本当に戻せないかどうか、そもそも効果がきれ

ないかどうか、これでわかる。

しばらくその揉め事を眺めていると、後ろからチヨイチヨイと肩を叩かれた。ビクッとして俺は後ろへと振り返る。そこには、小麦色をした魑の化け物が、にっこり笑顔を作ってそこに立っていた。

「しーっ。驚かんで」

「まさか……あの時の商人？」

よく見ると、商人の背中には巨大なソロバンが背負われていた。あれは間違いなく、あの時の商人の持っていた巨大ソロバンだ。人相ではなくソロバンでわかってしいうというのも、変な話だが。

「商人……じゃあなあで。ワシやあ商魑じゃ」

「まだ三日経ってないじゃないですか」

「いえいえ。アフターサービスっちゅう奴じゃ。お気に召さなけりやあ、すぐにでも引き取ろうゆうて思うとりまして」

と、商魑は手を揉みながら俺に愛想笑いを浮かべてきた。お気に召さないなんてとんでもない、こうして今効果を実感しようとしているところです、と伝えると、相手は嬉しそうな声で答えた。

「そりやあそりやあ……えかったんじゃ。まあ、気が変わるっちゅうこともありましょう。縁を完全に切らんやあいっつも返品でけるけえ、よろしゅうお願いするんよ」

「えっ。あ、しまった……」

迂闊だった、返品するつもりは今のところないが、万が一ということもある。俺は急いで切剣のツバを戻そうとした。

だが、その前に妙な空気を感じて、商魑が元いたところを俺は見返してみた。

そこらはもう、魑の姿はなく、ただただ薄暗い一本道のビル間の通路が広がっているだけだった。間に横道はなく、一体どこへ消えてしまったのか……。

奇妙に思っていて、俺はうつかりツバを戻すのを失念していた。慌てて俺は戻して見たが、目の前の光景は一切変わらなかった。

「あ……あ……」

二人の男女が終いには取っ組み合いの喧嘩になり、互いの顔を引っかきあい、髪を引っ張り合い、服を破りあう。なんとも醜い争いだった。

さつきまで、あんな仲良さそうにしていた夫婦が……あんなことにまでなるなんて。縁が切れるというのは、正にこういうことなのだろう。

おまけに、俺は一人の子どもの存在を抹消してしまったのだ。いわば、人を一人、この世から消してしまった……。なんと恐ろしいことか。

俺は身震いしたが、同時にこれの効果を十二分に実感することが出来た。罪悪感がまったくないわけではないが、これのおかげで俺の人生は薔薇色に開ける可能性が増えてくるのだ。

ケラケラと笑いながらも、俺はそろそろ出社することにした。ちゃんと切剣を風呂敷に包み、バレないように、鞆につめた。

そして、俺はトイレから出てきた。いよいよ、俺が幸せを掴み取るまでの第一歩へと進む時がきた。

迷いなど一切ない。俺は、存在を消したとはいえ、人を一人消してしまった恐ろしい男だ。それ相応にその存在を無駄にしないための努力をしなければならない。

俺は、そう自分の中で大義を掲げると、急いでトイレから出て、二人のことを探した。

剣を振るには、一振りできるだけの広いスペースがある場所があって、なおかつ隠れられるという条件つきでなくてはいけない。

何はともあれ俺は、あの二人のことを探し出して、機会を伺う準備をしなくてはならないのだ。

俺は、風呂敷の中に包んだ切剣に思いを馳せながら、意気揚々と廊下を走り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1045e/>

商馳

2010年10月20日18時49分発行